

昭和63年(み なつき 水無月) 6月5日 121号(次回発行6月12日)

1988年

江釣子6区

古墳太鼓を創作 伝統文化として取組む



江釣子村で五條丸古墳群のある6区公民館(高橋直一館長)で、地域ぐるみの組織参加のもとに将来、地域に継承して行くことのできる新しい伝統文化を築こうと「古墳太鼓」を創作、練習に取り組んでいる。

同地区には、昔から伝わる田植踊りがあった。しかし、時代の流れの中で、田植踊りの継承者がいなくなつた。そのため、記録をたどつて復活するより、新しいものを創り出したらという声

の佐藤正信さん。佐藤さんは、61年10月に調査にきたのをきっかけに、62年7月には6区の若い人たちに太鼓のたたき方の基本を教えた。今年に入って、佐藤さん

俺たちの太鼓に 稽古に情熱燃す

江釣子村の古墳群は、当時、相当の地位を占めた人たちの墳墓に違いないが、まだ、その特長はつかめていない。いずれ歴史研究の分野で考証されるだろうがこの「古墳太鼓」を打つに当たって、この古墳を理解することから始めたい、といっている。

ことには、古墳時代を経てそこから今の江釣子村の文化が育ってきたことを踏まえて、明日に生きる喜びがでてくることを期待し、この「古墳太鼓」を育てて行きたい、と佐藤さんは指導に当たっている。

現在、「古墳太鼓」を稽古しているのは、同地区の高橋義一さん、高橋利広さん、高橋英光さん、高橋辰彦さん

は、古墳太鼓の基調曲を持つてきて、本格的に、太鼓をたく姿勢とか、バチの打ち方を教え、4月27日から、毎月1回、佐藤さんが来村して具体的な稽古に入った。

なお、指導に当たっている佐藤正信さんは、魂鎮めと垂井の里と云われる程和賀地方を潤してきた清水、それに火、これらを表現するようにしたい。そして、この「古墳太鼓」は、受け継がれてきた文化として受け止めてほしい、と、古墳太鼓の指導に取り組んでいる。

写真上は、古墳太鼓の稽古に励む青年たちと指導する佐藤正信さん(左)